地域高齢者の服薬を多職種でシンプルに
―お薬持参型市民参加イベント―

丸岡 弘治 ●医療法人社団協友会 介護老人保健施設 横浜あおばの里 薬局長

キーワード：服薬簡素化、多職種連携、在宅医薬品適正使用

地域医療貢献のポイント

在宅高齢者の服薬困難を可視化し、かかりつけ医への相談を促すとともに、多職種連携を強化する。収集データは服薬簡素化ニーズを定量化する初のエビデンスとなり、地域医療の質とQOLの向上に寄与する。

1.背景と目的

横浜市青葉区・都筑区を中心とする横浜北部地域は、全国屈指の長寿地域として知られている。最新の市区町村別生命表（2020年）によると、男性の平均寿命において青葉区が全国第2位（83.9歳）、都筑区が同8位（83.3歳）を記録した。青葉区は過去に全国1位を2度獲得するなど、長年にわたり健康長寿の街としての地位を確立している。

しかし、長寿であることは、高齢期が長期化することに伴い、複数の慢性疾患を抱えるリスクが高まることも意味している。その結果、在宅生活を送る高齢者の多くが多剤服用（ポリファーマシー）の状態にあり、複雑な服薬管理が日常生活の大きな負担となっている。多剤併用によって生じる複雑な処方はアドヒアランスの低下を招くだけでなく、誤薬のリスクや介護者の負担増大へと直結する深刻な課題である。

この解決策として、剤形変更や配合剤の活用によって処方内容を整理する「服薬簡素化」は極めて有効である。しかし、住民や介護家族の間でその認知度は依然として低く、解決の鍵を握るかかりつけ医への相談行動には至っていない。本活動は、服薬簡素化の重要性を啓発するとともに、住民・介護家族が実際に使用中の薬を持参し、多職種で個別チェックを行う「お薬持参型市民参加イベント」を年3回開催するものである。服薬簡素化の可能性をその場で可視化することで、住民が主体的にかかりつけ医へ相談できる環境を整えることを目的とする。

2.取り組みの方法

各回のイベントは、2部構成とする。第1部は全体講座として、薬剤師による服薬簡素化の解説や多職種によるミニトークを実施する。第2部は個別お薬チェックコーナーとし、持参薬をもとに薬剤師が1対1で簡素化の可能性を試算し、「簡素化シミュレーションシート」と「かかりつけ医への相談メモ」を手渡しする。対象は、横浜市在住の高齢者本人・介護家族・地域住民（各回30～50名）とし、青葉区・都筑区周辺の公民館にて、2026年7月・10月、2027年1月の計3回実施予定である。参加者の同意のもとデータを匿名収集し、地域における服薬簡素化ニーズの実態把握にも活用する。

3.期待される成果

参加者の服薬困難感の軽減や相談行動の促進とともに、薬剤師・医師・看護師・ケアマネジャーが同一の場で連携することにより、地域の多職種ネットワーク強化に寄与する。収集データは地域在住高齢者の服薬簡素化ニーズを定量的に明らかにする初のエビデンスとなる可能性があり、学術的価値も高い。2027年度には日本老年薬学会等での学会発表・論文化を予定しており、本活動が地域医療における服薬簡素化推進の先進モデルとなることを目指す。